

通商産業大臣官房企画室編

世界の中の日本を考える

— 21世紀に向けての役割と貢献 —



通商産業大臣官房企画室編

世界の中の日本を考える

— 21世紀に向けての役割と貢献 —

刊行にあたって

現在、一八世紀の産業革命から発展してきた産業社会は、歴史的転換の時期を迎え、第二次世界大戦後の安定した世界運営システムも大きく変容しつつあります。また、産業・貿易の発展に伴い国際間の相互依存関係が急速に深化してきており、国際間の相互理解が深められる一方で、様々な摩擦が増大しています。このように現在の国際情勢は、経済面のみならず政治、文化等広範なレベルにおいて流動化、多極化の傾向にあり、二一世紀に向けて世界がグローバル・コミュニティとして平和と繁栄を享受していくためには、今ほど世界各国の協力が求められている時はないと言えましょう。

通商産業省では、このような基本認識の下、国際社会における日本の地位、役割の変化を踏まえて、二一世紀に向けて世界の中の日本の役割と貢献のあり方を検討するため、昭和六〇年九月から「世界の中の日本を考える懇談会（座長：村上泰亮東京大学教授）」を開催し、その検討を行ってきたところであります。

本懇談会は、外国人一〇名を含む各界の有識者二六名の委員から構成され、多岐にわたる問題について、歴史的かつグローバルな視点から多面的、インターディシプリナリー(学際的)な議論が活発に行われました。特に、この議論の過程において、外国人委員の方が日本に関して非常に鋭い観察をされていたということは、我々にとつて新鮮な驚きでありました。また、外国人委員が参加することにより、日本が直面する様々な問題について日本人だけのひとりよがりの発想にならない形で議論ができたことは、たいへん有益なことであつたと思います。本年四月、こうした議論の結果を報告書として発表したところ、広く国民各層から深い関心が寄せられました。そこでこの内容をさらに多くの方々にお読みいただくため、審議の過程で作成、使用した参考資料等を付して全文を刊行することといたしました。

本懇談会の報告書は、日本の将来について大きな理想を掲げたものであり、これをどう具体化し、実現していくかについては、引き続き政府、企業、個人等様々なレベルにおいて検討を必要とするものであります。したがって、この報告書を契機として、各界において二一世紀に向けて世界の中の日本の役割と貢献に関する活発な議論が行われることを切に願う次第であります。

最後に、御多忙中、精力的に御検討いただいた村上泰亮座長、香西 泰座長代理をはじめ

めとする懇談会委員の方々に対し、ここで改めて深甚なる感謝の意を表する次第であります。

昭和六一年六月

通商産業事務次官 小長 啓 一

はじめに

懇談会の開催

今日の国際情勢は、流動化、多極化の傾向にあり、二一世紀に向けて世界が平和と繁栄を享受していくためには、世界各国の協力と協調が強く求められている。日本も世界の一員として、自らが国際社会にどのような積極的な役割と貢献を果たせるかを真剣に考えていかなければならないと言えよう。このような問題意識にたつて、二一世紀に向けて「世界の中の日本」の役割と貢献のあり方について検討するため、昭和六〇年九月に小長通商産業事務次官によって本懇談会が設けられた（座長…村上泰亮 東京大学教授、座長代理…香西 泰 東京工業大学教授）。また、本懇談会に求められた広範囲かつ長期的な課題を考えるにあたっては、多面的かつインターディシプリナリー（学際的）な議論を進めることが必要と考えられ、その委員は外国人を含む様々な専門分野の有識者から構成された（委員は、外国人一〇名を含む二六名、委員名簿参照）。

懇談会の審議

本懇談会は、昨年九月に第一回会合を開催して以来、予定された検討テーマについて月一回のペースで、本年四月まで、計八回開催された（審議経過参照）。各回の懇談会においては、当該テーマについて二～三人の委員がプレゼンテーション・ペーパーを提出し、これを事前に委員全員に配布した。懇談会当日は、当該委員によるプレゼンテーションに始まり、続いて二～三人のコメント・タートルから意見を提出し、その後、全員でディスカッションを行うという形式で各回とも活発なディスカッションを行った。また、本年二月には、検討テーマを大きく国際政治、経済・企業、文化・制度の三分野にわけ、それぞれのテーマごとに少人数のワーキング・グループを開催し集中的な検討を行った。

報告書の構成

第Ⅰ部では、二一世紀の日本を考えるにあたって、まず歴史的な視点から世界の大きな流れを展望し、その中での経済的、政治的、文化的な日本の位置づけを検討した。第Ⅱ部では、第Ⅰ部の歴史的視点及びその中の日本の位置づけを踏まえて、二一世紀に向けて日本が掲げるべき理念は何かについて基本的な考え方をとりまとめた。次にこれを踏まえて、その理念を実現するために日本が

今から着手すべき努力のあり方についてとりまとめた。ここに掲げられた七項目は、必ずしも、体系的にすべての問題を問題を網羅しているわけではなく、本懇談会の委員が特に関心を持ち、集中的に議論をした点を取り上げている。また、世界に対する日本の姿を議論している過程において、特に日本人委員から、たびたび日本人の生活、価値観、国際性等に立ちかえった議論がなされた。第三部は、これらをまとめたものであり、二一世紀に向けて「世界の中の日本」を支えていく日本人が、「国際化」という言葉を意識しなくとも、日本人として自然に振舞うことが、そのまま世界で理解され受け入れられていくような存在になっていくことへの期待と、そのための社会的な条件について若干の指摘を行っている。

なお、本懇談会のディスカッションにおいて、①多くの委員から意見表明があったが十分議論を尽くせなかった点、②おおよそのコンセンサスはみられたが一部に強い批判があった点、③少数意見ではあるが極めて強い主張がなされた点については、各項目の文章の末尾に※印を用いてその要旨を示してある。

また、通商産業省では、二一世紀を展望した世界の中の日本のあり方について、昭和六〇年一月から昭和六一年二月まで「世界の中の日本―二一世紀に向けて」をテーマに論文募集を行った。この入選作品についても、報告書の該当箇所であつてゐる。

本報告書は、日本の将来についての理想を掲げ、その実現のための大きな方向を示したものであ

る。したがって、総じてかなり理念的なものも取り上げており、また現実との間にギャップを感じる箇所もあると考えられる。また、本報告書の趣旨、内容について、これをどう具体化し、どう実現していくかは、今後、引き続き議論していくべき問題であろう。本報告書が、世にこうした議論を投げかけ、その議論の中に、二一世紀に向けて日本が世界とともに繁栄し、世界がグローバル・コミュニティへと向かう道が開けてくることを切に願うものである。

世界の中の日本を考える懇談会委員名簿

座長

村上泰亮（むらかみ・やすすけ）

東京大学教授（経済学）

座長代理

香西 泰（こうさい・ゆたか）

東京工業大学教授（経済学）

（アルファベット順）

阿木 耀子（あき・ようこ）

作詩家

フランソワ・ベルジェ（仏）
（Berger François）

ベシネー・ジャポン株式会社代表取締役会長

クレゴリー・クラーク（豪）
（Clark Gregory）

上智大学教授（経済学、比較文化学）

ジェフリー・E・ガートン（米）
（Garten Jeffrey E.）

シェアソン・リーマン・ブラザーズ アジア・インコーポ
レーテッド マネージング・ディレクター

韓昇洲（韓国）
（Han Sung-joo）

高麗大学校教授（政治学）

イザベラ・ユベルツ（ベルギー）
（Hupperts Isabelle）

ベアリング・ブラザーズ社日本駐在員事務所代表

猪木武徳（いのき・たけのり）

伊丹敬之（いたみ・ひろゆき）

伊藤元重（いとう・もとしげ）

岩男寿美子（いわお・すみこ）

小林陽太郎（こばやし・ようたろう）

小島 明（こじま・あきら）

李國卿（中国）

（Lee Kuo Ching）

ジョン・F・ラックラン（米）

（Loughran John F.）

村上陽一郎（むらかみ・よういちろう）

アンワル・ナスチオン（インドネシア）

（Nasution Anwar）

岡部洋一（おかべ・よういち）

ジャック・L・オズボーン（米）

（Osborn Jack L.）

ロバート・V・ピアス（英）

（Pearce Robert V.）

大阪大学助教授（労働経済）

一橋大学教授（経営学）

東京大学助教授（国際金融、国際貿易）

慶應義塾大学教授（社会心理学）

富士ゼロックス株式会社取締役社長

日本経済新聞社論説委員

太平洋経済評論代表者

モルガン・ギャランティ・リミテッド副会長

東京大学教授（科学史、科学哲学）

インドネシア大学経済学部経済・社会研究所主任研究員

（経済学）

東京大学助教授（電子工学）

TRW オーバーシーズ・インコーポレイテッド副社長

アジア・太平洋地域担当

コーンズ・アンド・カンパニー・リミテッド 取締役

堺屋太一（さかいや・たいち）

山影 進（やまかげ・すすむ）

山本浩三（やまもと・こうぞう）

山本吉宣（やまもと・よしのぶ）

山崎正和（やまざき・まさかず）

財団法人アジアクラブ理事長、作家

東京大学助教授（国際関係論）

丹下健三都市・建築設計研究所取締役設計担当

埼玉大学教授（国際関係論）

大阪大学教授（美学、演劇論）、作家

世界の中の日本を考える懇談会審議経過

検 討 テ ー マ	
第一回 六〇年九月 四日(水)	二一世紀に向けて世界の中の日本を考える視点について 〔各委員からの問題提起〕
第二回 一〇月二二日(火)	国際システムの変容と日本の位置づけについて ・現在国際システムがどのように変革し、二一世紀に向けてどのように変容していくのか。 ・また、その中において日本はどのように位置づけられ、どのような分野(国際政治・経済・安全保障・文化面等)、考え方や哲学で世界に貢献していくのか。(南北、東西関係における日本の位置づけと役割、アジアの中の日本、環太平洋地域における日本の位置づけと役割等を含む)
第三回 一一月 九日(火)	貿易、通貨金融、経済政策面における役割と貢献の在り方 ・国際貿易システム、通貨金融システムの安定化(貿易面、通貨金融面における役割と貢献の在り方) ・世界的に調和のとれた経済政策運営
第四回 一二月一七日(火)	一、世界の平和維持、安全保障、南北問題解決(経済協力)等の諸問題における役割と貢献の在り方 二、世界の相互理解を深め、相互交流を促進するための世界の中の日本の役割と貢献の在り方

第五回 六一年一月二〇日(月)	・技術者、留学生、教育者、企業人等の人的交流 ・国際的な文化交流 ・各国社会の慣習、制度、哲学等の相互理解
第六回 二月一八日(火)	世界の中の日本の社会システムと日本人 ・日本の経済社会の文明的的位置づけ、産業社会の変容について ・「世界の中の日本」としての日本社会の展望
ワーキング・グループ 二月一七日(月) 及び二月一九日(水)	一、主として国際システムの変容と日本の位置づけについて 二、主として貿易、通貨金融、国際経済関係及び企業に関する諸問題 三、主として人的交流、制度、文化等の諸問題
第七回 四月 七日(月)	「報告書(案)」について
第八回 四月一八日(金)	報告書提出

目次

はじめに……………1

第I部 二一世紀に向けて「世界の中の日本」を考えるための

歴史的視点……………1

——今、何故、「世界の中の日本」か——

第一章 産業社会と国際システムの変遷と日本……………3

一、技術革新と産業社会の変化……………3

——新たな産業革命、新たな産業社会の胎動——

二、世界運営の変容……………10

——ヘゲモニーシステムから米国を中心とした「共同運営体制」へ——

三、世界の相互依存の深化……………20

——グローバル・コミュニティ意識の芽生え——

第二章 世界文明の変化と日本社会 29

——日本の国際化の深化に向けて——

一、日本文化の特質 30

二、世界文明と「日本的」性格 34

三、日本の国際化の深化に向けて 39

第II部 二一世紀に向けての「世界の中の日本」の役割と貢献 43

——基本的な考え方と努力の方向——

第一章 基本的な考え方 45

——日本が掲げるべき三つの理念——

一、共同運営体制の主要な担い手としての日本 46

——グローバル・コミュニティ意識にたつて——

二、国際経済社会の活力としての日本 51

——文化的豊かさを持った「経済貢献型国家」をめざして——

三、アジアの国としての日本 56

——アジアの安定と開かれた地域協力に向けて——

第二章

「世界の中の日本」としての役割と貢献

——今から取り組むべき努力の方向(七項目の提言)——

63

一、自由貿易の一層の発展をめざして

64

——「産業調整問題」と「産業構造問題」への新たな取り組み——

二、構造変革型政策協調の推進

85

——国際的マクロ不均衡の調整のために——

三、摩擦なき海外直接投資の推進

97

——企業の国境を越える経済的、技術的貢献——

四、国際化の中の日本企業

114

——経営の国際的融合と「分散シェアリング」の展開——

五、人・科学技術の相互交流

128

——日本を国際的な交流の場に——

六、南北問題への積極的対応

145

——自立的発展の支援と絶対的貧困の救済——

七、安全保障及び世界平和への努力

159

——地域の安定をめざして——